

『NEW TREASURE 研究会 東京会場』実施レポート

日時	平成 27 年 10 月 10 日 (土) 13:30-18:00
場所	東京国際フォーラム会議室 G409

時間	内容	講演者	所属・役職など
13:30 13:35	開会の挨拶	稲葉治	Z会 営業部部長
13:35 14:35	【第一部】 世界とつながるためのプラットフォーム ～NTに見る英語をアクティブに活用するポイント～	山田 英雄	かえつ有明中学高等学校 教諭
14:35 14:50	【Z会からのお知らせ】 NT3 改訂についての案内	二宮瑛子	Z会 編集担当
15:00 16:00	【第二部】 ICTを活用した英語授業実践	金子誠 鹿内芳貴	広尾学園中学校・高等学校
16:10 17:10	【第三部】 世界と繋がるNEW TREASURE ～西武台新座の試み 英語×ICT	栗原隆恵	西武台新座中学校・西武台高等学校
17:10 17:25	【Z会からのお知らせ】 StudyLinkZなどのICTソリューション	内田康夫	Z会 教務・進路担当

【講演要旨と質疑応答】

【第一部】 世界とつながるためのプラットフォーム

～NTに見る英語をアクティブに活用するポイント～

かえつ有明中・高等学校 山田英雄先生

・大学入試が変化する兆し→Speaking は英語として必然だが、評価方法（インタビュー）との課題で敬遠されてきた。しかし入試の変容（外部試験による Speaking 導入など）とともに授業も変化していかなければならない。

・ただし、現場の先生方の時代の Speaking はパターンプラクティスが全盛期。正確に覚える・繰り返すことが大半だった。今の授業でもそれは根底にあり、生徒への指導にもパターンプラクティスを入れていることが多いだろう。

○英語教授法の視点から

(1)「書物」からの情報収集のための「訳読」

日本人の根底には訳読文化が流れている。これは大切な思想で、日本の大学入試にも引き継がれている。一方で、「覚える」ことが優先になってしまったという弊害もある。

(2)その後のパターンプラクティスでは正確さが重視された。ただし、その場に応じた柔軟な対応が難しかった。

(3)「通じる」英語を重視する考え方としての Communicative Language Teaching (1980 年代～)

現状はこれらを融合したようなものになっている。

第二言語習得の視点では、最近は Input に限らず、Intake, Integration なども進められている。

授業で中心となっているのは Language Competence (文法や語彙) だが、Strategic Competence

(会話としての成り立ち, 談話文法) のほか, **Real world** に出てわかること, 気づくことも心理的な部分で学習に大きな影響を与える。

Personality, Attitude なども含めた教育をしないといけない。「異文化理解」は **Communicative Competence** の中で非常に重要な部分(言語トレーニングだけでなく, 文化の理解も含めて指導することが大切)。『**NEW TREASURE**』発刊時に目指していたのも, **Cognitive Competence** を強化すること。日本人として外国語の英語を学び, 使うための土俵に上るために必要なこと(発想・思想)を教えたいと思っている。

○どのように **Cognitive Competence** を養うか

日本の国語教育は豊かなコンテンツを扱うが, もう少し体系的になってほしいと考えている。**Logical (Critical)** であることと, (日本語として) 論理的であることがやや混同されているかもしれない。

多民族が暮らす国で民主主義を守るための土台になるのが「言語教育」(**Language Arts**)。ロジカルに考えるスキルを使って, **Compare Contrast** させている。この仕組みを分析し, 定式化すれば世界に通用する(日本人的な英語からの脱却, クリティカルな視点の体得)のではないかと考えている。

クリティカルに見るためのプラットフォームはすべてパラグラフの中に詰まっている。言いたいことの宣言→**body** (言いたいことを納得させるための手法: 並べる・比べる・因果関係を述べる・事実を元に述べる など) →**Conclusion** という流れ。

また, クリティカルに見るためのサブスキルのトレーニングがとても大切だが, あくまで「サブスキル」なので, スキルの学習が目的になってはいけない。

○認知レベルと説得力

タキノミーの段階ごとに区切ったスキル・トレーニングを『**NEW TREASURE**』の中に散りばめている。(欧米でいうところの) クリティカルな視点が身につくようになっている。レベルが上がると, 高学年ではディスカッションやディベートができるようになる。

○Passive から Active へ

授業の中で「自発的に」発言させるのは難しい部分もある(**Semi-Active**) が, パラグラフの構成がわかり, 自分事として考えられるようになれば, 自発的に「話そう・伝えよう」という姿勢が養われる。

そのための **Trigger Questions** が非常に大切になってくる。英語はツールで, 使うための方法やそのよさを伝えていきたい。Active に使うための手法を伝える授業を行いたい。

【第二部】ICTを活用した英語授業実践

広尾学園中学校・高等学校 金子暁先生、鹿内芳貴先生

【金子先生より】

・学園設立以降, 8年間で生徒数が半数に減ってしまった。このままの枠組みだと復活が難しいと考え, 伝統と積み重ねの部分を更新してスタートした。(2007年～)

・2007年以降, 生徒数は増加し, 偏差値も向上している。

- ・ 中学入学時に全員が ICT 端末を購入する。（コースによって iPad, Macbook, Chrome Book など）
- ・ 今年度から、中学に医進サイエンスコースを設立した。Chrome Book, Google Apps for education を活用している。
- ・ インターナショナルコースの中学 AG コース：出願の段階で英検 2 級以上を条件にしている。SG は英語ゼロだが、倍率が高いため、かなりハイレベルな生徒が集まる。
- ・ 中 1 で科学的な発表、論文など→高度な ICT 環境、高校生のサポートなどがあるとここまでの高度な内容が可能となる。
- ・ 教科指導のその部分でもさまざまな出会いや刺激を与えていく。

【鹿内先生より】

- ・ 本科コース：中 1～高 1 の 4 学年で iPad を使用している
- ・ 毎日持ち帰って充電してくる。校内 Wi-Fi には常時接続+フィルタリング
- ・ 自宅に Wi-Fi がない家庭もあるという前提で検討する必要がある（学内完結/オフライン使用など）
- ・ 実際の運用では、教材の配布・閲覧ツール/情報収集ツール/教員との双方向のやりとり/プレゼンテーションツール

○鹿内先生の ICT 活用事例

①日程連絡、教材配布

Google Apps for education (web サイト作成, ファイル添付可能)
 アクセス権限の設定が可能 (←著作権への考慮)
 プリントの一元化, アーカイブができるため, 先生の管理も効率化

②情報収集ツール

ロングマン英和辞典 (オフライン使用可) : 紙の辞書, 電子辞書の両方の良さを兼ね備えている
 web で使用できる辞書, Google 翻訳 (使用場面, リテラシーの指導)
 調べ学習…Read に関する調べ学習+発表 (1 minute presentation)
 KeyNote, パワーポイントなどのアプリを使用
 Grammar の題材を素材にするのもあり (Great Britain) …素材, 負担によっては日本語も使用
 まとめた内容を個人間で共有→英語でも発表させてみる
 「教える」から「学ぶ」への転換

③プレゼンテーションツール

Keynote…Wi-Fi がない環境 (自宅) でも使用可・アニメーション豊富
 Google slides…別 OS でも編集可
 過去形を学習後は, Diary (毎日, 昨日の日記を 3 文程度で作成/写真を入れたりペアワークでミスを確認しあたり) に取り組むことも。

④生徒と教員の双方向連絡ツール

学校での管理可能 (学校ドメインのアドレス作成可/連絡範囲も個別設定可: 中学生は学内のみ)
 Google Drive…動画やファイルを保管・共有できる (暗唱英文を撮影したデータを提出など: 撮影

は保護者にやってもらう)

音声ファイルへのアクセス…NHK 基礎英語の例文をチャンツに加工→閲覧させる (DL 禁止に設定) Garage Band/CUBASE

グループでの動画撮影…1 回きりの発表とは異なり, 何度もやり直して良い物を作り上げようとする姿勢も養われている

Google Docs…ファイルを共有, 同時編集できる

ロイロノート…カードごとに音声を録音することができる。英検の面接練習等に使用

○その他のツール: xreading, 受験サプリ、Classi などから必要な要素を抽出して活用している。

○まとめ

- ・4 技能を伸ばすために: 発話活動がたくさんできる (その場が難しくても録音して提出)
- ・デジタルとアナログは共存できる
- ・ICT はサポートツールであり, 生徒の理解が最優先
- ・「教わる」から「学ぶ」に変わっていきたい

質疑応答

Q プロジェクトの仕込み～発表までの時間はどのくらいかかるか。

A 長いものだと 2～3 週間かかるが, それ以外の投げ込み的なプロジェクトは 1.5 コマくらいの分量を分割して行っている。慣れてくれば, 5～10 分程度でも行える。(1 コマ=50 分だが, 本編は 30～40 分に設定し, 短時間で生徒の興味を引き出すような活動を行っている。)

Q 先生間で ICT 端末を使う頻度は異なるか

A 先生によって異なるが, 生徒自身の慣れもあるので, 学年全体で共通項目などは設定している。

Q 先生向けの ICT 勉強会などはあるか

A 長期休みに教員研修が行われる。研修の中では各教科に分かれて問題点やアイデアをシェアしている。全体会でもリテラシーやモラルについて (こちらのほうが大きな問題になりがち), 知識を啓蒙している。生徒に対しても担任を通して指導している。

【第三部】世界と繋がる NEW TREASURE～西武台新座の試み 英語×ICT

西武台新座中学校・西武台高等学校 栗原隆恵先生

・開校 4 年目, 入学生が高 1 になったばかり。

○教育観のパラダイムシフト

⇒客観的評価, 暗記中心の学習から, 主観的な評価, 経験から学ぶ学習へ

⇒知識は与えられる⇒気付きは自ら構成する

⇒ある時点の能力を評価⇒継続的な評価

・世界が変わる→社会が変わる→大学入試も変わる

* 大学入試改革

→発音試験・四技能試験 (外部試験) ・スピーキング

→「覚える」から「考える」試験への変更 (ロジカル→Critical)

→英語の文章題に含まれる語数の増加

○デジタルネイティブの生徒のための ICT をフル活用した授業

- ・問題解決型・アクティブラーニング⇒英語科授業での試み（どうやって落としこむか）

3年間の授業テーマ：学校を知ろう（中1）～地域を知ろう（中2）～世界を知ろう（中3）⇒オーストラリアへの修学旅行につなげる

*日本の文化を伝え、現地の方々に喜んでもらおう

○アクティブラーニング

・PBL（課題解決型学習）やPIL（教えあい学習）があるが、軸になるものはCritical Thinkingである。

- ・講義があつてこそそのグループ活動だと考えている。

講義の良さ：短時間で知識の伝達ができる／問題提起・情報の整理

- ・調べ学習…インターネット、書籍、教員の作成した資料

- ・教員の役割…生徒の意見を聞き、つまづきに対する「気づき」を与える [ファシリテーター]

- ・情報の整理…タブレット端末のメモ、ノート

- ・グループ活動…3人1組が基本→6人・9人に組み合わせていく

- ・根拠を持って相手を納得させるように説明する（小さな発表は毎回行う）

・自分たちで考え、伝えたいという気持ちで作成することで、魅力的なムービーにたどり着くことができた。

- ・偏差値が目的ではない（過去問は扱っていない）が、SSは48（中1）から58（中3）まで上昇。

○西武台の英語の特徴

- ・発音・発声を重視

中1では発音に2コマを充て、音素ごとにトレーニングを行う

発音アプリ「ジングルズ」：自分の発音を録音・再生できる（評価はできない）

- ・栄養価の高い英文読解

『NEW TREASURE』を活用し、未知の問題へ対応する力を作りたい

- ・「覚える」から「考える」授業へ

デジタル教材の使用（板書時間の削減、考える時間の捻出）

NT-Lab（教材の活用、よりよい授業の検討）

ロイロノート、Evernoteなどの活用

- ・英語を自然に身につける姿勢

今までの英語の延長線上ではあるが、結果としても成績アップにつながっている

○読解指導

動詞を色分けすることで「考える」力を身につけることができると考えた。

パターンプラクティスも織り交ぜながら定着→ルールを自分で作らせる（動詞の変化）

生徒と一緒に色分け→ルールに気づける／疑問文や否定文を自分で作れるようになった（既知の情報から未知の情報を推測）

文法事項でもアクティブラーニングは可能（進行形にできる動詞・できない動詞の仕分けなど）

NT-Lab の教材を自分なりに活用して使用している（高瀬先生の完了形のアニメーション教材）
コアイメージも伝えながら生徒自身に考えさせる、抽象化させる授業を行う
文法問題集も扱う（解答を ppt 上で表示）。空欄補充と整序を中心に行い、長文は画面上で理解させる（文字をどんどん消していく）

○英語を自然に身につける

大学入試の長文に対応するためには英語を英語で理解する（情報処理のスピード・正確さを上げる）
必要ある。これは、長文の比率の増加からもわかるだろう。
授業では OUP の絵本を使用し、日本語訳を与えない状態で意味を取れるようにしていく（内容を推測しやすい）

○Z会へのお願い

- ・スピーキング力の測定，練習を行うソフト（添削）
 - ・教科書に準拠した文法項目の演習をタブレット上で行いたい
- 苦手分野の分析，対策問題の自動作成
- ・絵本や長文素材の充実（電子化）

質疑応答

Q 文法項目の色分けは他にもしているか

A 今は Be 動詞，一般動詞，助動詞，時を表す副詞（接続詞）のみにしている。

Q スライドはどのように作成しているか

A ICT の根底には人の気持ちがあるので，土日を使う（時間をかけて作業する）こともある。既存のものを Revise して活用することも多いが，Z 会にも充実させていってほしい。

【所感】

●ICT，アクティブラーニングなど，教育のトレンドになっているキーワードが昨年よりもぐっと前に出てきた印象でした。とくに『NEW TREASURE』採用校では昨年，今年と ICT 環境を整備している学校も多く，現場の変化をひしひしと感じました。

一方で，現場で生徒と向き合う先生方だからこそ，「ICT，アクティブラーニングはあくまでツール」であり，必要な箇所には柔軟に取り入れるものの，導入が目的化してはいけないという方向性を感じました。生徒の理解・成長を目的としたときに過不足のない商品・サービス設計が重要だと思います。

●アクティブラーニング，スピーキング，ICT 等のワードはますます『NEW TREASURE』採用校の先生方の中でも課題となっていることが，この度の研究会から感じられました。Critical Thinking の理論と『NEW TREASURE』の講演に始まり，各実践のご講演では Critical Thinking の理論をベースに置きながら，ICT を用いて生徒さんの学習を効率化する仕掛けや教材，授業メソッドを編み出されていて，たいへん参考になりました。StudyLinkz の機能がこうした新しい取り組み・ご要望にも沿った形でリリースできればと思います。

以上